

○タイトルコール

ドイル 「ドラマCD。甘く優しい世界で生きるには。先輩たちの卒業式」

○学寮内 ドイル自室(床…絨毯)

レオパルドに卒業式での要望や、卒業後の基本業務を説明しているドイル。
SE…書類がすれる音、トントンと紙を整える音など。

ドイル 「——賃金に関する説明は以上です。

何かご質問はありますか？」

レオパルド(以降レオ) 「大丈夫だ」

ドイル 「では業務の説明に移ります。

レオ先輩にはアギニス家に住み込みで働いてもらうかたちになります。

そのため、まずは執事のセバスから公爵家に仕えるために必要な知識と作法、それから我が家で生活する際の注意事項を学んでいただきます」

レオ 「生活するための……注意事項？」

ドイル、神妙な顔つきで告げる。

ドイル 「母上やお爺様からの誘いを断る方法や、思いつきに巻き込まれた

時の対処法の伝授です。

母上は世間知らずなところがあるので、たまにとんでもないことをされます。

お爺様にいたっては、一般人が付き合うのは物理的に無理があるというか……まず、身が持ちません。

レオ先輩の安全を確保するという意味もありますので、こちらはしっかりと聞いてください」

レオ 「……しよ、承知した」

ドイル 「まあ、そのあたりも含め、生活に慣れるまでは、セバスとメリルが見てくれますから、安心してください」

レオ 「わかった」

ドイル 「では、話を戻します。

薬師や治療師としての業務は修行も含め、メリルに任せてあるの
で、彼女に従ってください。

部屋と専用の研究室を用意させてありますし、素材や道具は彼女
が仕入れたので、種類も量も不足はないと思います」

レオ 「ついに……会えるんだな」

ドイル 「彼女も楽しみに待っているみたいです。

なんでも、もう温室で薬草を育て始めているとか」

レオ 「お、温室？ そんなもんだであるのか……」

ドイル 「あ、ちなみにこれが研究室や温室に入れてある物の一覧表です」

束ねられた書類の中から数枚取り、手渡しするドイル。

レオ 「お、おう」

それらを受け取ったレオパルドは、内容を確認するや顔を引きつらせる。

SE…ページをめくる音

レオ 「……学園を卒業したてのガキには……過ぎたる設備だな」

SE…書類を机に置く

ドイル 「先行投資ということで——期待していますよ？」

不敵に笑うが、武者震いのせいか、声が微かに震えているレオパルド。

レオ 「——フツ、俺を選んだことは後悔させねえ。

必ず見合う成果を出してやっから、楽しみにしとけ」

ドイル 「俺からの話は以上となりますが、なにかご質問はありますか？」

レオ 「ない」

ドイル 「では、一連の契約内容に不服がなければ、

こちらに署名をお願いします」

契約書と羽ペンを差し出すドイル。迷うことなく記入するレオパルド。

SE…紙を机に滑らせる音、つけペンで書き込む音。

レオ 「これでいいか？」

ドイル 「ええ。それにしても……」

書かれた内容を確認しないでいいんですか？」

口端を上げて笑うレオパルド。

レオ 「信じてっからな。これからよろしく頼むぜ、ご主人様」

ドイル 「こちらこそよろしくお願ひします」

ドイルとレオパルド、握手を交わす。

○校舎内 会議室(床…絨毯)

雑談代わりに昼間のことを 그레이 に報告するドイル。

그레이 「そうか。無事に雇用契約が済んだのならよかったな」

ドイル 「はい」

그레이 「まあ、あれだけの条件を提示されて蹴る者はいないだろうが」

呆れた眼差しの 그레이。苦笑いのドイル。

そんな二人を見ているクレアは首を傾げている。

クレア 「ドイル様はどのような条件を示されたのですか？」

그레이 「生活用の部屋を敷地内に一室と、

宮廷薬師室並みの器材を揃えた研究室、

それから薬草を育てるための温室だ。

素材や研究資料も、ある程度はアギニス家持ちで用意する上に、

ここ数年、専任の薬師や治療師を雇っていないからうるさい上司
がいない」

ドイルのかわりに説明する 그레이。説明にクレアが感嘆交じりに呟く。

クレア 「それは、すごいですわ」

그레이 「長年城に勤める宮廷薬師だって飛びつく条件だろ？」

ドイル 「先行投資ですよ。それよりも……」

クレア

「このようなところに俺達を呼び出して、なんの御用ですか？」
「確かに。私もお話しを伺いたく思いますわ、お兄様。
談話室ではなく、

わざわざ学園の会議室をご指定なさるなんて……何事ですか？」

お茶を飲んでいたグレイはゆったりした動作でカップを置く。

SE…カチャリ カップをソーサーに置く音。

グレイ

「先程、学園長直々に今年の卒業式や関連行事を取り仕切ってほしいと頼まれてな。」

セルリー殿の赴任やユリア殿がメイドとして学園に来る手続き、
ドイルも七不思議の調査のために夜間の外出許可をもらっていた
しな……

色々と世話になってのことだし、引き受けることにした」

ドイル

「すると、昼食会やお見送りの？」

グレイ

「ああ、それらを含む一式だ。卒業式、昼食会、お見送り、すべて
の監督を任された」

クレア

「……もう、そのような時期なのですね」

グレイ

「ああ。早いものだ」

クレア

「この一年、あつという間でしたわ」

グレイ

「本当にな」

ドイル

「……いささか、責任者の選出が遅くはありませんか？」

グレイ

「セルリー殿が連れてきたメイドの後処理や、

他の行事の対応に追われ、手が回らなかったそうだ」

二人のやり取りを見て何かを察したクレアが、若干引きつった顔で尋ねる。

クレア

「……お兄様？ ちなみにですが……」

グレイ

卒業式まで、あとのくらの期間が残されているのですか？」

クレア

「今日を含め、二か月だ」

グレイ

「に、二か月!？」

グレイ

「他の人員は俺が自由に決めていいと言われたので、

昼食会はクレア、

お見送りの時に行く演出のすべてをドイル、お前に任せる。

俺は全体の指揮と卒業式だ。

今話したとおり、当日まで時間がない。

今日中に各自が行う仕事内容の確認と、明日からの作業日程を組む必要がある……」

絶句するドイルとクレア。

ドイル・クレア「……っ！」

グレイ 「ドイルもクレアも……今日は帰れないと思え」

グレイ 「(お茶を一気に煽る)」

SE…カチャリ カップをソーサーに置く音。

グレイは顔を引き締め宣言する。

グレイ 「ただいまより、エピス学園高等部の卒業式、

並びに関連行事に関する会議を始める。

議題は、各自の仕事内容と明日からの作業日程だ」

ドイル・クレア「……はい！」

ドイルN 『こうして、俺達の、怒涛の日々が幕を開けるのだった……』